

古代ハワイ音楽(2)

内 崎 以佐美

III 器楽

[I] 弦楽器

- (1) 'ukekē

[II] 管楽器

- (1) 'ohe
- (2) ipu hōkiokio
- (3) pū
- (4) pū lā'ī
- (5) oeo

[III] 打楽器

(A) 太鼓類

- (1) pahu
- (2) ipu
- (3) pūniu

(B) 固体楽器

- (1) kāla'au
- (2) papa hehi
- (3) 'ili'ili

(C) 竹筒

- (1) kā'eke'eke
- (2) pu'ili

(D) 「ガラガラ」類

- (1) 'uli'uli
- (2) 'ulili
- (3) kupe'e niho 'ilio

[IV] その他

- (1) ni'au kani
- (2) bamboo tubes

[註]

III 器楽

本稿では、前稿の「声楽」に関する解説に続いて「器楽」、つまり、西欧文化との「接触前」におけるハワイに存在したとされる楽器ならびにその音楽について解説したい。

1820年以前とされる、西欧文化との所謂「接触前」(pre-contact)、あるいは、「宣教師来訪前」(pre-missionary)といわれる時代の器楽は太古の時代から永きに亘って存在し形成されたものであった。この期間のハワイは、ポリネシア圏内外の位置する他の諸島との接触はあったものの、19世紀半ば迄は殆ど閉鎖的と言ってもよいくらいの外界から閉ざされた文化圏であった。そこで育った打楽器、弦楽器、管楽器といったものを見て言えることは、ハワイと接触があったとは到底考えられないような遠隔の地の文化圏にも、ハワイとほぼ同様の打楽器、弦楽器、管楽器が存在している事例が実に多いことである。丸太をくり抜いて生き物の皮を張った太鼓、植物の果実の殻の空洞を利用した打楽器、竹などの植物の茎部で作った笛、巻貝の笛、木片に繊維を張った弦楽器など、こうしたものは、世界各地で人類が誰から教えられともなく、身の廻りにある自然物の材質を見、手にするうちに思い付く同じような着想によって生まれたものである。人種や地域にかかわらず、或る物に対する人間の着想には世界共通のものがあるように見える。これは作られた楽器の形態や機能についてだけでなく、楽器の奏法についても言える事例がある。例えば、ハワイで19世紀末に考え出されたと言われるスティール・ギター奏法のような、弦楽器を演奏する際にバーを持って弦を押さえながら弾くという類似の奏法が、インド、中国、日本でも存在しているという事実があるが、これなども、人間の持つ着想が人種や地域を問わず同じであることが、奏法の点においても見られることの例であろう。

古代ハワイ音楽で用いられたとされる楽器についても、それぞれ何らかのかたちでその着想を同じくするものが世界の何処かの民族音楽の楽器として存在した可能性があり、

ハワイとはほぼ同様の類型のものが他の地域にいくつか存在したことは充分考えられることである。ハワイとこれらの地域との間に直接の接触がないにもかかわらず、こうした事実が存在することについては、考え方によっては、我々現代人の知らない太古の時代に移住等による何らかの直接的接触に等しいことが起こっていた可能性もあり得ないことではないとも言える。

西欧文明との接触前からハワイに存在したとされる、ハワイの所謂古楽器のうち、絵画等の記録でしかその存在の確認し得ないもの、現物が博物館に保存されているもの、これらすべてを分類すると次のものがあげられる。一応“musical instrument”(楽器)とされてはいるものの、単なる“sound-producing instruments”(発音器具)の域を出ないものもあるが、これとても、フラ・ダンスの動作に合わせてリズムをとるのに用いられたとされるなどの理由で、楽器の範疇に含められている場合が多い。

これらの楽器に用いられている材質について言えば、ハワイ諸島が亜熱帯の海洋性気候で比較的が多雨である風土であったことがこれに一つの特徴を与えている。椰子、竹、ならびに比較的固く緻密な木質のkauila(カウイラ)、koa(コア)といった樹木が豊富であること、瓜の類の草木の生育に適していたこと、野山には亜熱帯特有の色彩鮮かな羽毛を持つ鳥が多かったこと、近海の潮流の関係で捕鯨や漁業が盛んで鯨骨や魚類の皮が日常的に入手出来たこと、などで、これらを材料にして容易に楽器作りが出来たし、就中、椰子の実、瓜、竹筒といったものは、その形状からして、さほど手を加えずとも楽器に仕上げる事が出来た。

1、弦楽器 (string instruments)

‘ūkēkē⁽²⁾ (ウケケ)

2、管楽器 (wind instruments)

I nose flute (鼻笛) : ‘ohe (オヘ)

II gourd whistle (瓜笛) : ipu hōkiokio (イプ ホオキオキオ)

III shell trumpet (貝殻喇叭) : pū (プウ)

IV leaf whistle (木の葉笛) : pū lā‘ī (プウ ライ)

V bull roarer (唸り木) : oeo (オエオエ)

3、打楽器 (percussion instruments)

(A) 太鼓類 (drums)

I wooden drums (木製太鼓) : pahu (パフ)

II gourd drums (瓜製太鼓) : ipu (イプ)

古代ハワイ音楽(2)

III knee drums (膝太鼓) : pūniu (プニウ)

(B) 固体楽器 (solid instruments)

I hula sticks (フラ用打棒) : kāla'au (カラアウ)

II treadle (踏み板) : papa hehi (パパ ヘヒ)

III stone castanets (石製カスタネット) : 'ili'ili (イリイリ)

(C) 竹筒 (bamboo tubes) : ka'eke'ek (カア エケエケ)

: pu'ili (プイリ)

(D) 「ガラガラ」類 (rattles)

I single gourd rattle (一瓜式) : 'uli'uli (ウリウリ)

II triple gourd rattle (三瓜式) : 'ulili (ウリリ)

III dog tooth rattle (犬歯式) : kupe'e niho 'īlio (クペエ ニホ イリオ)

4、その他

I jew's harp (ユダヤ式ハープ) : nī'au kani (ニアウ カニ)

II bamboo tubes (竹筒) : 'ohe kā'eke (オヘ カアエケ)、hoehoe (ホエ ホエ)

これらの楽器のうち、特にフラ・ダンスの際に多用されるとして、hula instruments (フラ用の楽器) とされるのは次のものである。

pu'ili (プイリ)

kāla'au (カラアウ)

'ili'ili (イリイリ)

papa hehi (パパ ヘヒ)

kupe'e niho 'īlio (クペエ ニホ イリオ)

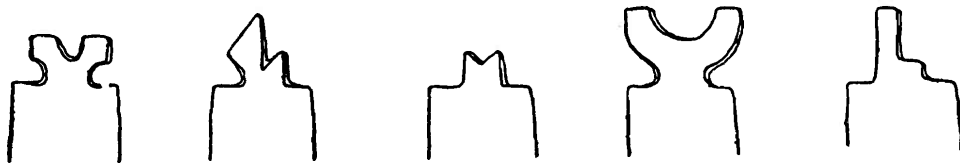
以上列挙した楽器の多くは、ハワイのホノルルにある Bernice Pauahi Bishop Museum (バーニス・パウアヒ・ビショップ博物館、通称“Bishop Museum”) に保存、展示されている。

本稿でとり上げた楽器のイラストレーションは、種々の資料から断片的にしか収集出来なかった写真や図版等による画像をもとにコンピューター・グラフィック (CG) の手法で統一するというかたちで図示することを試みた。CG ならびに関連の作業はこの分野の専門家に依頼した。CG ならではの斬新な感覚で楽器の特徴を再現出来ていると思う。最近封切られた宇宙飛行の映画では、ロケ、特撮、セット撮映などの代わりにすべて CG で画面が作られたというが、CG の作る画像の方が、現実の物を実写したものより、より象徴的で現実性を帯びた実感を与えるとするなら、CG は、今後、目的によっては、映像、画像によるプレゼンテーションの有効な手だてとなって行くと思われる。

[I] 弦楽器 (string instruments)

(1) 'ūkēkē (ウケケ)

西欧との接触以前にハワイに存在した唯一の弦楽器が楽弓ウケケであった。ウケケは、太古の時代にマルケサス島からハワイに移住した人等の第一陣がマルケサス島に utete (ウテテ) という類似の楽器を持ち込んだものがその由来とされているが、ヘレン・ロバーツによるとオーストラル諸島にはウテテよりもさらにウケケに近いものが存在していた⁽³⁾。ハワイのウケケは kalaila (カライラ) または 'ulei (ウレイ) の木片を材料に作られ、長さは15から24インチ (平均約20インチ) で幅は1~1.5インチであった。両端は心持ち細くなっていて魚の尾の様な形状になっており、一方の端には張ってある弦が巻きつけてあり、もう一方の端には縦に切れ目がつけてあり、夫々弦の一方の端がはめ込まれて弦が張ってある。この「魚の尾の様な形状」をヘレン・ロバーツは “fish tail” (「フィッシュ・テイル」) と称し、収集したウケケのそれを分類し次のスケッチを記録に残している⁽⁴⁾。



張ってある弦は通常2~3本で、1本のこともあり、また、4本以上のこともある。弦の素材は椰子の実の繊維を燃ったものが最も多く用いられたが、馬の尻尾の毛や羊腸も用いられた。本体の表面は平面、裏は凸形であるが、弦が本体の表面に密着すると弦が響かないので、弦と本体の木板を少し離す目的で、弦の一方の端に瓢箪の皮の小片などが駒として本体と弦の間にはめ込まれた。調弦は「フィッシュ・テイル」の部分への弦の巻き方つまり弦の張り方の強弱によっておこなう。

調弦の際の各弦の音程つまり各弦間の音程差、ならびに全体的なピッチは、文字通り演奏者の好みによっていたようである。しかし伝統的な三弦のウケケの調弦法といわれるものに、上二本の弦を完全4度、第三弦を長2度程度下げる、例えばF・G・Cといった間隔のものがあつた。これとても全体的なピッチはその都度一定していなかつた。時代が下ってキリスト教の hīmeni (讃美歌) が普及するようになってからはこの影響で、西洋音楽に準じた、例えば、長調の triad (主三和音) C・E・Gの間隔で調弦されるようになった。専ら開放弦で弾弦されたので、ある種の和音を出すことは可能であつたが、弦を張った本体の木板を指板として用いることはしないので一本の弦で旋律を奏でることはなかつた。

奏法は、左手でウケケの左端を弦の張った側を外にして水平に持ち、右端に近い部分を両唇でくわえる。弦を弾くと口腔部は弦楽器の共鳴胴の働きをし、舌は言葉を話したり、歌ったりする際と同様に動く。その際奏者は自らの音声は発しない。椰子の実の中の固い部分やタバの繊維を細く撚り合わせたものを用いてかなり速く弦をかきならすのである。弦は一度に一本の弦のみを弾くのであるが、三本の弦とも近くにあるので他の弦も共鳴して音を出すこともある。メレの或るものはその旋律をウケケで真似て演奏された。たとえば、立踊フラの一つである hula 'ōlapa (フラ・オラパ)などはウケケの旋律を伴奏に演奏されたが、その際、チャントに当たる部分をウケケで演奏した。また、“Aloha Kilauea” (「アロハ・キラウエア」) というフラは⁽⁵⁾プイリを加えたウケケの伴奏で踊られた。ウケケの演奏を聞いて、継続的にその旋律を促えると、メレ・フラで歌われる旋律に似せて演奏しているかに聞こえるが、これは単一音程に調弦された弦のみで、高低をつけて弾弦して旋律を作り出すことが出来ず、専らリズム的な音のみが響いて聞えるからである。それも次の様な簡単なリズムの繰り返しである。いずれも古来の伝統的なパターンである。



近世から現代に入って以来、ウケケが演奏される機会は極めて少ないと言ってよい。チャント歌手がありフラの名手でもあった Dandy loane (ダンディー・イオアネ) がウケケを達者に演奏し、1883年のカラカウア王の戴冠式のセレモニーで演奏して名声を博したことから彼は「ダンディー・イオアネ・ウケケ」(Dandy loane 'Ūkēkē) と呼ばれるようになったという。1920年代初頭に“‘Aia Honolulu Ku'u Pōhaku” (「アイア・ホノルル・クウ・ポハク」) というメレがウケケの曲としてよく用いられたのが知られている。1930年代に Akoni Mika (アコニ・ミカ) が Lalani Village (ララニ・ヴィレッジ) のフラの行事にウケケの演奏を披露しており、また、1940年代になると Makalei Montgomery (マカレイ・モンゴメリー) と Fred Beckley (フレッド・ベクレイ) がウケケのリバイバルを試みようとしてつとめている。また、ハワイの民俗学者の Mary Kawena Pukui (メアリー・カウェナ・プクイ) が自らウケケの演奏の模範を示したものがビショップ博物館に残されている。彼女は教え子の Kaupena Wong (カウペナ・ウォン) にこの楽器の奏法を伝授している。変わったところでは、歌手の Palani Vaughn (パラニ・ヴォーン) がカラカウア王を記念して製作したレコードの中で簡単なテクニックながらウケケの演奏を入れたものがある。



[II] 管楽器

(1) 'ohe (オヘ)

ノーズ・フルート（鼻笛）と英語で呼ばれるが、mouth flute（マウス フルード）つまり口で吹くフルートでなく、文字通り、鼻で吹くフルートであり、'ohe(オヘ)、hano（ハノ）、'ohe hano ihu（オヘ ハノ イフ）などと呼ばれる。マウス・フルートでは、パン・パイプの類のものもハワイでは存在しなかったと言われるが、小さな瓢箪で作られた口で吹く楽器は存在したとする説もある。

オヘ（ノーズ・フルート）は10~20インチほどの長さで口径が1~1.5インチの竹製であり、一方の端の節はそのまま残してあり、他方の端の節は抜いてある。節のある側に鼻孔があけてあり、少し離れて、2箇所指孔つまり指で押さえてふさぐ小さな穴があけてある。3箇所のものもあるがこの場合余分の一つは鼻孔に近い方にある。

奏法としては、通常右の鼻孔で吹き、左の鼻孔は左手の親指又は人差指で押さえつつ、右手の親指と人差指でオヘを水平に（時には垂直に）支え持ち、右手の中指と薬指で二つの指孔を夫々押さえる。3ヶ所指孔がある場合には右手の親指で吹口に一番近い指孔を押さえる。

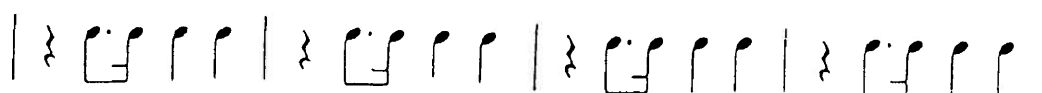
古代ハワイ音楽(2)

ノーズ・フルートは機能的には、通常のマウス・フルートと異なり、口で発する音声の変形とも言うべき音色を出す。つまり、チャントで歌われるリズムとともにチャントの音程に近いものを竹筒を通じて出す役割を果たした。専ら mele ho'oiipoipo (メレ・ホオイポイポ) つまり、愛の語らいのムードを歌うチャントに合わせて演奏され、チャントと殆んどこれに近いユニゾンで演奏された。⁽⁶⁾

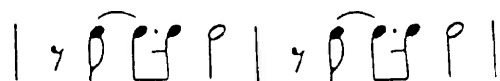
ノーズ・フルートの発祥の地については諸説があるが、これはこの楽器がポリネシアの各島に存在していることによる。タヒチからパフと共に持ち込まれたとする説もあるし、オアフ島のカネオへあるいはカウアイ島にその起源があるとする説もある。⁽⁷⁾

ノーズ・フルートのメロディー・ラインはその音が、声帯から口腔部を経て発せられる音声の延長といった特性を持つので、その拍子は一定のパターで持続せず、すぐにイレギュラーなものとなる。⁽⁸⁾これはウケケの場合も同様である。

メロディー・ラインのフレーズは、吹く者の呼吸能力により、長短があり、音程は略々同じ高さで推移するが、半音位ずつ下がりがちとなる。拍子のパターンは次のものが多い。



また、次の例の様に、付点音符で専ら記譜すべきメロディー・ラインやシンコペーションとも言うべき装飾的なものも多かった。

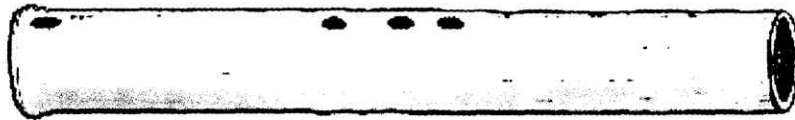


鼻で吹くフルートながら、ビブラート、モルデント、トリルといった装飾音を出すこともよく行なわれた。

19世紀には特に初頭において、オへはパフと共に演奏されることが多く、時代が下って、パフにギターが取って代わることもしばしばあった。西洋音楽のフルートがハワイに持ち込まれて普及すると、オへの音色も西洋のフルートに似せられて演奏されるようになり、西洋音楽のグループと共演する迄になった。1840年代には、ハワイ島のヒロで、ホ長調の曲がオへとの共演で演奏された。1930~1940年にオへのリバイバルの時期があり、Kahea Beckley (カヘア・ベックリー)、Makalei Montgomery (マカレイ・モンゴメリー)などが名オへ奏者として活躍した。モンゴメリーは1951年の映画“Bird of Paradise” (「楽園の鳥」)のサウンド・トラックでオへを演奏している。民俗音楽専門のレーベル、ニューヨークの Folkways Records からは Tom Hiona (トム・ヒオナ) がオへ演奏のレコードを出している (FW8750)。現代ハワイ音楽のグループでも、Beamer

古代ハワイ音楽(2)

Brothers (ビーマー・ブラザーズ) や Kalimas (カリマズ) もオヘを取り入れている。



(2) ipu hōkiokio (イプ ホオキオキオ)

hōkiokio (ホオキオキオ) または ipu hōkiokio (イプ ホオキオキオ) とも言われるこの鼻笛は ipu hoehoe (イプ ホエホエ) とも呼ばれることがある。このイプ・ホエホエは竹筒の類の呼び名に誤用されることもある。これは、洋梨位の大きさの小型の瓢箪で作られた笛で、時として kamani (カマニ) という木の実で作られることもある。上部の中心に1インチ程の気孔が開いているが、これはノーズ・フルートと同様鼻で吹くためのものである。そして側面部に2箇所または4箇所の小穴がつけられているが、これは指孔である。音色はこの楽器の構造からして単調で音量は小さく、物静かで低い音色の楽器である。イプ・ホエホエの“hoehoe”とはこの種の笛の出す低い長く響く静かな音を意味する。

演奏の際には、左手で笛を持って右の鼻孔に吹口を押しつけて吹くのが普通で、オヘの奏法と同様である。

楽器の側面につけられている小穴は、指で穴をふさぐ場合のために、2つの小穴は縦に並べてあけてあるが、これととも、厳密に音階のことを考慮したものとも考えられず、実際に出る音程は、半音程度の上下の差のあるもので、ヘレン・ロバーツなどは、一つ

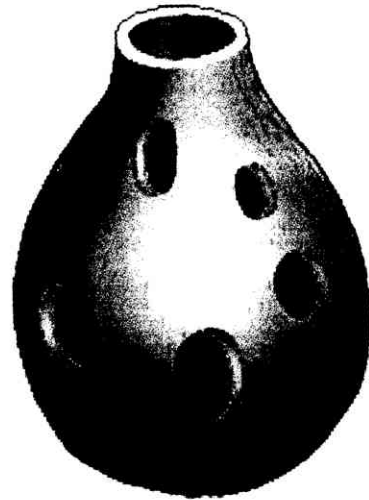
古代ハワイ音楽(2)

の音程しか出ない“whistle”(「呼び子」)だという表現を用いている。指の使い方によって、半音程差のトリルの音が出せることを指摘している説もある。

イプ・ホオキオキオは、他の古代楽器と異なり、現代のハワイ音楽の演奏に取り入れられることは殆んど無いが、Keola and Kapono Beamer (ケオラ・アンド・カポノ・ビーマー)はこの楽器を取り上げている。



(3) pū (プウ)



巻き貝 (conch) の類を笛として用いるのは古代世界の各地で行なわれたが、ハワイにもこれらが残されている。⁽⁹⁾ 貝製の一種のトランペットであり、その音は2マイル以上離れた場所にも届くとされており、これは楽器と言うよりも儀礼用又は、信号用と鳴り物といった性格のものでも⁽¹⁰⁾ある。貝の種類としては「ほら貝」(triton) または「カシス」(Cassis) が用いられた。貝の頭部に吹穴のあるものとなないものがあり、又、裾の部分に持ち運ぶための紐を通す孔を開けているものもある。近年このプーを現代のハワイ音楽に楽器としてとり入れる傾向も生まれている。例えば、ヒロ・カリマズ(Hilo Kalimas) というグループは「ラウパアホエホエの若者」(Boy from Laupāhoehoe) というレコードでプーを楽器としてとり入れている (Hula HS 505)。また、ハワイのミュージシャンではないが、フロリダ、キー・ウェストのサーロウ・ウィード (Thurlow Weed) は、この種の巻き貝の笛で幅広い音域にわたって半音が出せるまでの技法を身に付け、ピアノやオルガンの伴奏でフォーク・ミュージックやベルディなどのクラシックの作品

も手がけている。



(4) pū lā'ī (プウ ライ)

植物の葉を巻いただけのものを吹くという一種の笛という性質上、博物館に保存されている事例は皆無である。プーライ (Pūlā'ī) の pū はトランペット、lā'ī は ti (タイ) という植物を意味する。タイの葉を幅 $\frac{3}{4}$ インチ、長さ 5 ~ 6 インチのリボン状に切り取って、これを巻いて約 1 インチ余りの笛にしたもので、上下の唇にはさんで吹くと単音のリード楽器に似た音を出す。リボンの大きさ・巻き方・吹き方によって、ピッチと音量・音色に差異が生じる。リボン状の葉の端の部分がリードの働きをして音が出るのであるが、葉の巻き方で、葉の端の複数の箇所が同時にリードの働きをすることがあり、この場合は単音でなく複数の音による和音を発することがある。⁽¹¹⁾ 単なる草笛の域を脱して広く普及したようで、ハワイ王室にもプーライを愛好する人たちが居た。

(5) Oeoe (オエオエ)

北米やオーストラリアの原住民の間でよく用いられていた bull-roarer (ブル・ローラー) あるいは thunder stick (サンダー・スティック) とされるもの。日本語では「唸り板」(うなり板) と訳されているが、これは枝の小片に紐を付けてこの端を振り廻すと、唸り声を上げるもので、雨乞いや豊饒祈願の際に用いたこともある。ハワイの「ブ

古代ハワイ音楽(2)

「ル・ローラー」はこの一種の変形とも考えられるもので、kamami (カラミ) の種子または小型の椰子の実の外殻を擦って薄くしたものの上頭部に約1インチ程の孔を開けて下部に2つの小孔を開けて紐を通したものである。この紐の端を振り廻すことによって唸り声に似た音を出す。楽器と言うよりも子供の玩具に近いものと考えられる。この楽器はフラの際に時折とり入れられることもある。



[III] 打楽器

(A) 太鼓類 (drums)

(1) pahu (パフ)

一種の太鼓であり、coconut (椰子)、breadfruit (パンの木) の丸太を削り貫いたものに、鮫の様な大型の魚の皮を vibrating membrane (鼓膜) として張ったものである。主に鮫の皮が用いられる。大きさは高さ1フィート、直径7~8インチのものから、高さが3フィート、直径20インチをそれぞれ超えるものもある。鼓膜は olonā (オロナ) という樹木の繊維で作った紐で、本体の底部にかけて締めつけ固定されている。鼓膜を上に向けた状態で太鼓を地面に置いて演奏する。高さからして演奏者は座って演奏し、素

古代ハワイ音楽(2)

手で両手を用いて叩くので kettle drum (ティムパニー) の一種だとも言える。それぞれ異なった箇所を叩くと、異なった音色を出す。14~15世紀の時代は、ポリネシア全域において各島間の交流の盛んな時代であったが、この頃ハワイに移り住んだ人たちのうち、上流階級の者がタヒチから持ち込んだと言われる。最初は神殿における宗教上の儀式に用いられ、神聖なメレ・フラとともに演奏された。⁽¹²⁾ パフは後述の pūniu (プニウ) という椰子の実に膜を張った太鼓とともに演奏されることが多いし、またノーズ・フルートと共に演奏されることもある。プニウと共に演奏されるのは、パフが主たるリズムを低音で刻み、その合間にプニウの高い音でリズムを刻むかたちで、高・低を合わせ持たせるという、ハワイに古くからある対称的な二つを以って一つのペアにするという傾向の表われであるといえる。そしてこの高音のリズムのためのプニウに代わるものとして、小型のパフが用いられることもある。これを lapaiki (ラパイキ) と呼ぶ。パフのリズムは、ipu (イプ) という後述の瓢箪を用いた打楽器によるものに近いように見えるが、むしろ ūlili (ウリリ) という後述のものに近い。パフのリズムはスラック・キー・ギターのベース・ランニングの持つリズムの感じと似ており、パフから取り入れたものとも言える。⁽¹³⁾

パフの基本的なリズムの一つは、下記のようなパターンのもので、これが変形されて、テンポが早められたり、個々の特定の拍子が強められたりの変異が加味される。

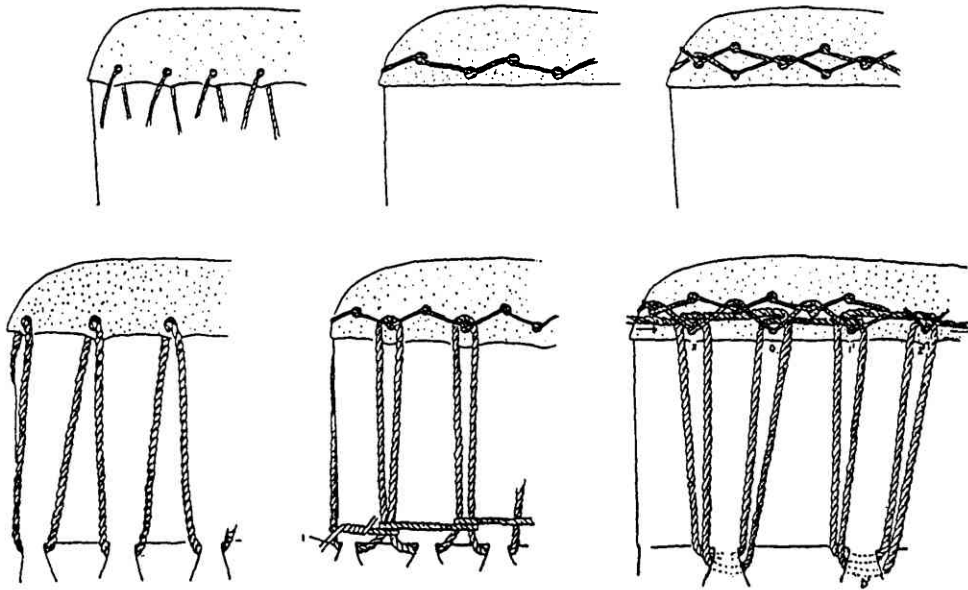


パフのリズムは多様性と予見不能というか不規則といった表現でその特徴を述べる以外にない。即興的なときもあれば同じ長さの響きを持ってメトロノームに合わせているかのような規則正しいリズムで打たれることもある。同じ打楽器でもイプのリズムとは相容れないものがあり、パフもイプも hula 'āla'apapa (フラ・アラアパパ) に用いられるが、パフが入った場合とイプが入った場合とは、それぞれのステップが異なる。むしろ、パフのリズムに合うものとして、ウリリが共に用いられたことがある。その場合は次のリズム・パターンの繰り返しとなる。

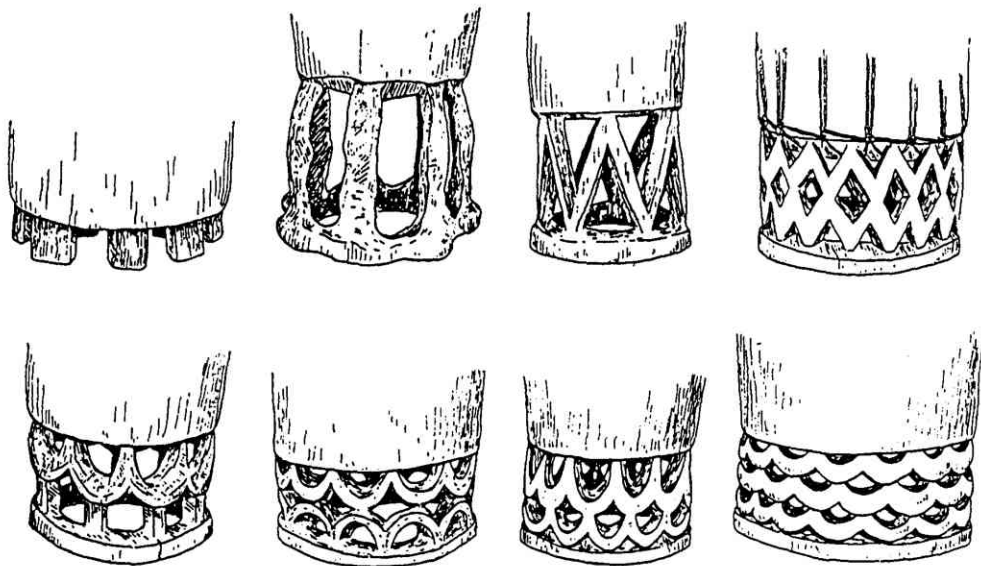


魚の皮の鼓膜を太鼓に紐で固定する際の紐の廻し方のパターンを集めた資料もある。⁽¹⁴⁾

古代ハワイ音楽(2)



また、太鼓の胴の台座の部分の模様にも種々の意匠を凝らしたものがあり、これを下
 記のパターンに分類した資料もある。⁽¹⁵⁾



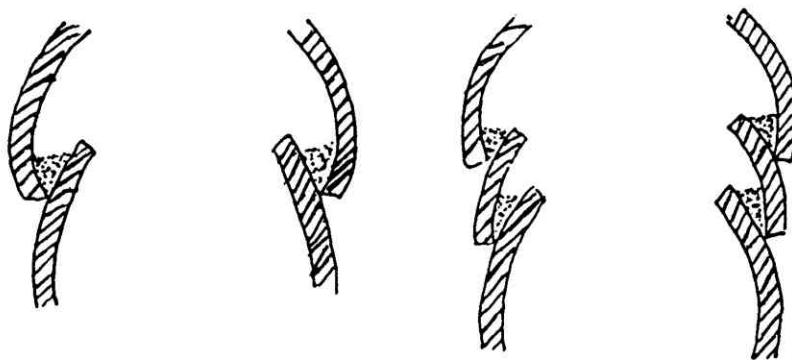


(2) ipu (イプ)

イプとは calabash (瓢箪) または gourd (瓜) の類を意味し、pā-ipu (パアイプ)、ipu wai (イプ ワイ)、hue wai (フエ ワイ) とも言う。イプの構造は、大きさの異なる二つの瓜の中身を抜いて小さい方が上になる様に合体されたもので、上部は口をあけてある。接着にはパンの木から取った粘液を用いる。上の方の瓜は小型ながら横に膨んでおり、下の方のものは細目でより長い。大きさは高さで10~20インチ前後であるが、なかには3フィートものものもある。イプの原形となるものはポリネシアの他の島から持ち込まれたものといわれるが、その後はハワイでも自生の瓜を使ってイプが作られるようになった。そしてイプを作るために特別に或る種の瓜がハワイで栽培されるようになった。甘瓜の mānalo (マナロ) と酸味あるいは苦味の 'awa'awa (アワアワ) の二種類が知られている。現在ではこのような栽培はおこなわれていないが、イプは現在のハワイ音楽やフラでも盛んに用いられていることもあり、この需要を満たすためにメキシコやカリフォルニアから瓜が輸入されている。上下に二個の瓜をつなぎ合わせた二連のイプを ipu heke (イプ・ヘケ) と言うが、中には一個の瓜こみのもあり、これは ipu heke'ole (イプ・ヘケオレ) と呼ばれ、特に座って踊るフラの一種である hula kuolo (フラ・クオ

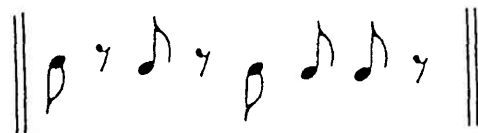
古代ハワイ音楽(2)

ロ) において踊り手がイブを叩いてリズムを刻むときに用いられる。イブ・ヘケは表面に塗料などは塗らないのが普通であるが、現代の市販のものはニスで塗装されている。1800年代のもので入墨模様が施してあるものもある。イブ・ヘケの継ぎ目つまりくびれた部分には、布切れ、タバの繊維、植物の蔓などが巻きつけてあるものが多い。イブ・ヘケにおいて、二個の瓜をつなぎ合わせる方式には二つあり、一つは単純に二つをつなぎ合わせるが、いま一つの方は、二つの瓜の間に襟状の「つなぎ」を挟んだ状態をつなぎ合わせる仕方である。これは上と下の瓜の接着部分の口径に差がある場合に、この「つなぎ」を喰ませて隙間が出来ないようにするためのもので、別の瓜から切り取った部分でこの「つなぎ」を作る。瓜と瓜の接着部分は、パンの木から採った液のような脂（やに）状の物質により固定している。



ハワイには、二つの相対するものを一對として捉える行き方があるが、イブの奏法についてもこのことが言える。奏法には二つのものがある。一つは地面の上に置いた衣製あるいはタバの繊維で作った台座の上にイブを叩きつける、つまり、スタンプ (stamp) によって内部の空気を震わせることにより、低い虚ろな感じの音を出すのと、いま一つは、イブを台座の上におくか時には上に持ち上げてその側面を手の指で叩く、つまり、スラップ (slap) によって鋭い高い音を出す方法である。前者 pā (ペア)、または ku (クウ)、後者を pa'i (パアイ)、または pā (ペア) と呼んでいる。この呼び方の違いはフラの系統や家系によってのものである。

イブはハワイの古代楽器のうちで今日迄用い続けられて来た唯一のもので、その古来の伝統的なリズムのパターンは次のものである。



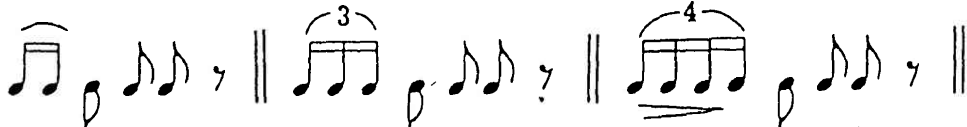
ヘレン・ロバーツはイブのリズムのパターンは、次のように、基本的には一つとしており、pa'i (パアイ)、つまりスラップによる ornament (オーナメント)、つまり、装飾的な拍子も無いとしているが、



例えば、‘ala‘apapa (アラア・パパ)あるいは‘ōlapa (オラパ)と言われる立踊フラの基本的なリズムのパターンを kāhela または kāholo (カヘラまたはカホロ) とい、その代表的なものは次のパターンの様に変化を伴うものである。



達者な kumu hula (クム・フラ) つまり、フラ行事の司祭や歌手になると、次の様なオーナメントのスラップを加えた打ち方となる。これには親指と他の指、あるいは4本ないし5本の指を同時に使って、速さや音量に変化をつける。



スタンプとスラップを織り混ぜて演じることもおこなわれる、‘ami kūkū (アミ・クウクウ) といわれる腰を早く3回転する動きの入ったフラでは、一連のスタンプの拍子の間に種々の異なるオーナメントを挿入する。また、イブを吊している輪を手首に巻いた手で、スタンプとスラップの合間にオーナメントのスラップを挿入することもおこなわれる。このオーナメントのスラップを打つ手は見ただ目には大変優雅な動作に見える。このオーナメントの名演として、クム・フラの Lokalia Montgomery (ロカリア・モンゴメリー) のレコード (“Hole Waimea”, Waikiki Records 45-532) が知られている。

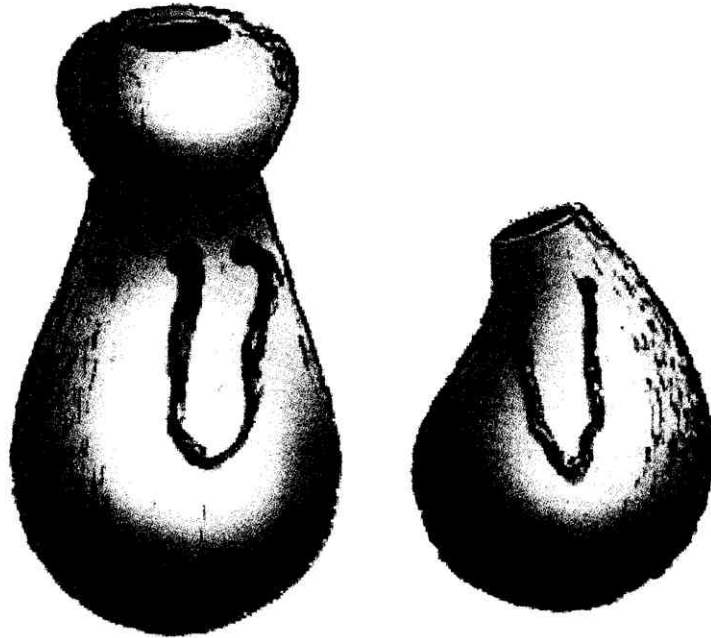
イブのリズムは専ら4拍子系のダンス・ステップに沿って刻まれているが、伴唱のチャントのリズムの強弱に必ずしも対応しない。むしろ、チャントのリズムに対してシンコペートするもので、4拍子のうち、2番目と4番目の拍子でおこなう。達者なダンサーとイブの奏者は、ダンスのステップは規則的に踏まれているのに対して、腕と手の微妙な動きを入れて、唄とイブの間でのオーナメントやシンコペーションを含むリズムの上での相互関係をうまく表現して行く。

ところで、イブをスティック(細い棒)や紐状のもので打つ場合もある。特に1800年代にはスティックで演奏したという記録も残っているものの、もともと瓜の皮部を乾燥させたものであるから、材質としては大変脆く、固いもので打つことは出来ない。

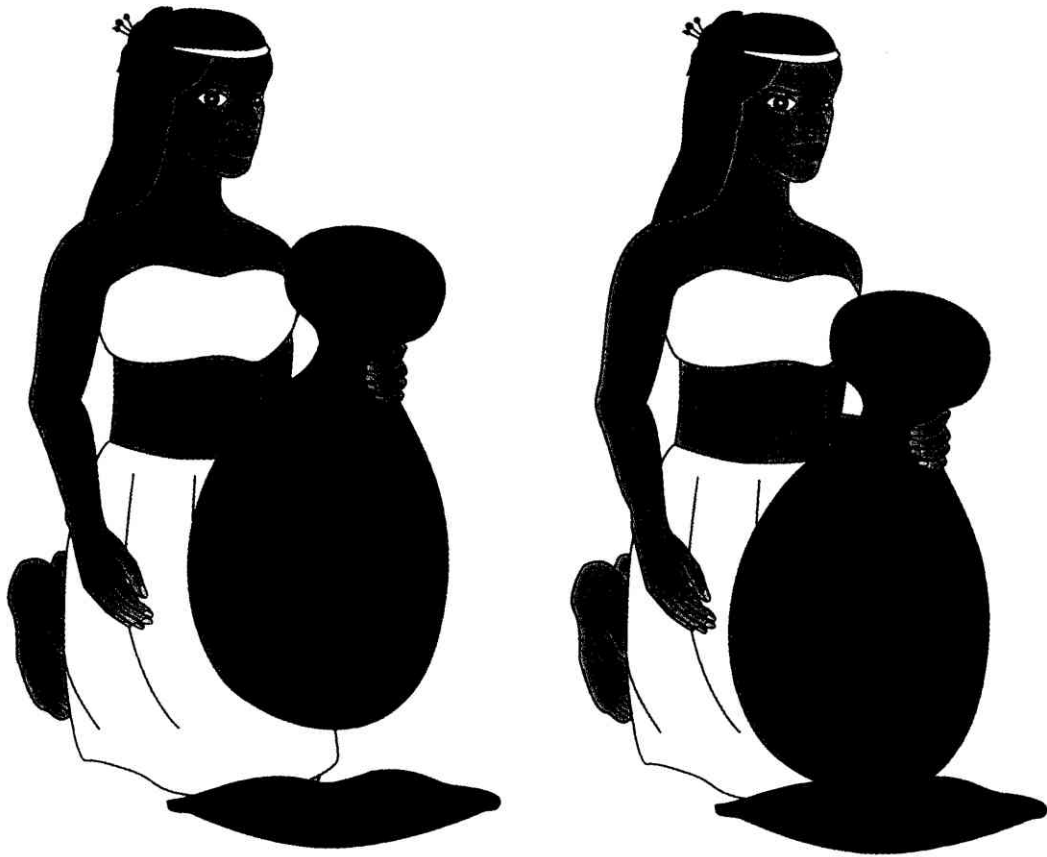
19世紀には、イブは大きな行事で6個～8個のものが用いられるのが普通で、1822年には5個のイブを用いて演奏した記録があり、1883年のカラカウア大王の戴冠式において hula kuolo (フラ・クオロ) では7個のイブが用いられた。⁽¹⁶⁾ 今日では通常は一つのグ

古代ハワイ音楽(2)

ループで一つのイブを用いるのが普通とされている。例外的に Edith Kanakaole (エデス・カナカオレ) の主宰するハラウで3つないしそれ以上のイブを用いたこともある。



古代ハワイ音楽(2)



(3) pūniu (プニウ)

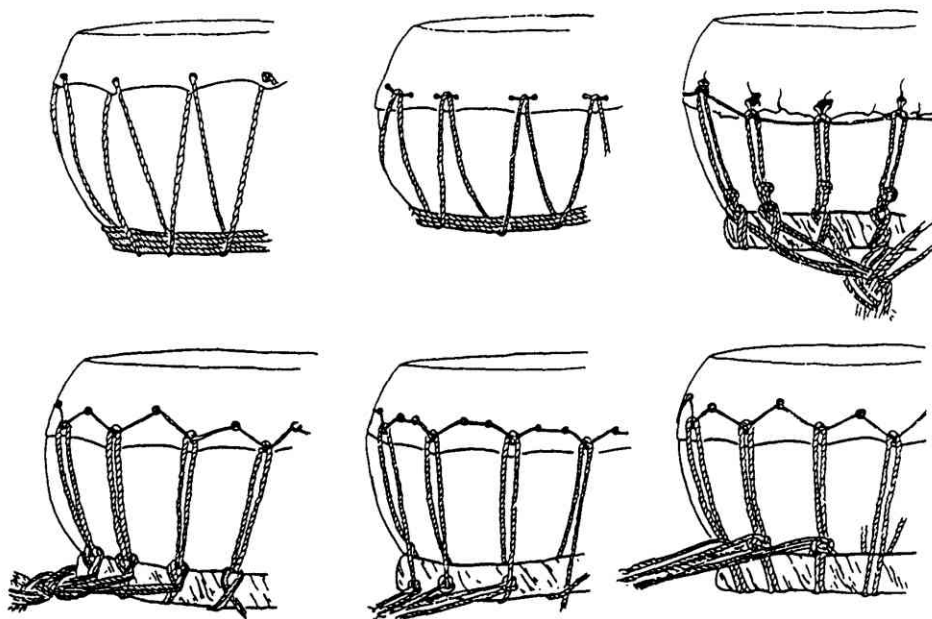
椰子の実の殻の上部と下部を切り取った状態の上部の方に、kala (カラ) という魚の皮または鮫の皮を張った小型の太鼓で、これらの魚の皮は鱗が極く小さいということで用いられている。腿の膝に近い部分に紐で結びつけて演奏する。オロナという植物の蔓で作った紐か、軟かい曲り易いスティック状のもので叩く。プニウはこの楽器のみで演奏することは少なく、専らパフと共に演奏され、それもパフが主たるリズムを刻む合間に叩かれるというかたちをとる。かつてはイプと共に演奏されたこともあったものの、今日では古いスタイルの再現のための演奏の場合に限られる。プニウとパフとの共演でプニウに代るものとして小型のパフである lapaiki (ラパイキ) が用いられることも⁽¹⁷⁾ある。低音のパフが男性を、高音のプニウまたはラパイキが女性を象徴するとするハワイ特有の「対称」という考えによるものであろう。イプが現代のハワイ音楽を演奏するグループでも多く取り入れられるのと異なり、プニウは殆んど取り入れられることがない。

パフとの掛け合いの一例をあげると次の様なパターンとなる。



(パフ) (プニウ) (パフ) (プニウ) (パフ) (プニウ) (パフ) (プニウ)

太鼓の上部に張る魚の皮を、紐でどのようにとりつけるか、下図の様に略々6通りの方式がこれ迄に確認されている。⁽¹⁸⁾





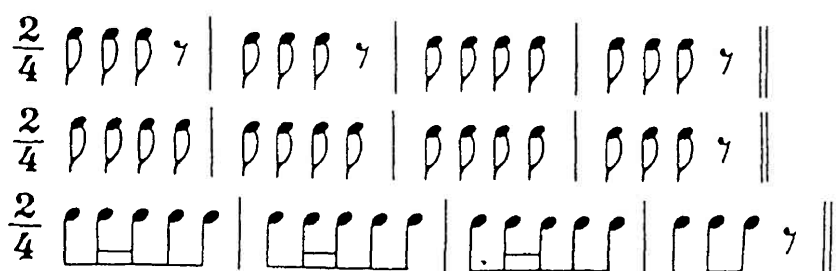
(B) 固体楽器 (solid instruments)

(1) kōla'au (カラアウ)

熱帯産の kauila (カウイラ) といった硬い材質の木で作られた一対のスティックである。一対の各々の長さは異なり、長い方は約3フィート、短い方は7~10インチで、通常は左手で長い方を持ち、こちらは動かさずに、右手で短い方を持って長い方を打つという奏法である。hula kōla'au (フラ・カラアウ) というエネルギッシュなフラの伴奏に用いられるが、立踊の場合、papa hehi (パパ・ヘヒ) という後述の踏み板に似た楽器と共に用いられる。また、時代が下って、座踊のフラでもカラアウが用いられる。また、この場合は、長さ10~12インチ程の左右同じ長さのカラアウをそれぞれ両手に持って打ち合わせる。カウアイ島では様々なフラ・カラアウが踊られたが、この地のものは非常

に活気があって、例えば ōlapa (踊り手) も ho'opa'a (奏者や歌手) も共にカラアウを用いたし、変った奏法としては、両手にカラアウをそれぞれ持ち、別のカラアウを足の指で挟んで、これらで地面に置いた横木を叩くということが行なわれた。

カラアウは、パフあるいはイプと共に用いられることがある。カラアウで打たれる拍子のリズムは、今日、チャントが歌われる際に伴奏に用いられるパフのリズムによく似ている。カラアウのリズムがどのようなものであったか、記録に残っている古いものでは、1821年に Reverend Hiram Bingham (ハイラム・ビングム師) が採譜、記譜したものがあり、そして1926年のヘレン・ロバーツの記録にも同様のリズムが記譜されている。



リズムのうち3拍子目が強調される。第一段目のものは、拍子が次第に強められて次のかたちに移行することがある。



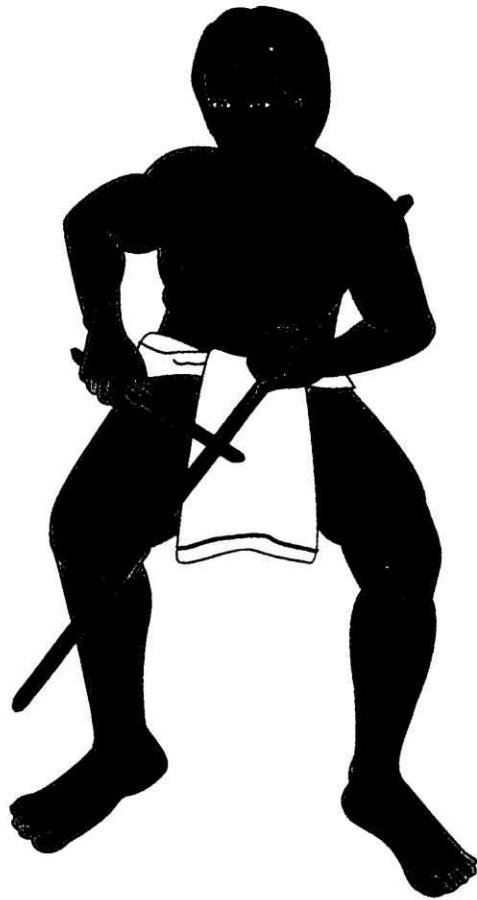
座踊のフラ・カラアウでは、4分の4拍子、あるいは4分の2拍子の曲で次の様な感じで三連拍子の打ち方が多用される。



フラ・カラアウ、つまり、カラアウを伴奏に用いるフラであるが、19世紀初頭特に盛んであった。1800年~1810年頃、ホノルルで、Don Francisco de Paula Marin (ドン・フランシスコ・デ・ポーラ・マリン) なる人物が特に傑出したカラアウの使い手であったことが知られている。また、カラアウは王侯貴族達の間でもよく用いられ、このためか、Prince Liholiho, Kamehameha II (リホリホ王子、後にカメハメハ二世) を歓迎する催しでは、100名にも上るダンサーによるフラ・カラアウが踊られたといわれる。

カラアウと他の楽器との組み合わせとしては、メレ・フラ (mele hula) において、パフ、プニウと共に用いられたこともあるし、また、今日の演奏グループ (スラック・キー・ギター、ウクレレ、ベース) がカラアウを取り入れることもよく行なわれる。

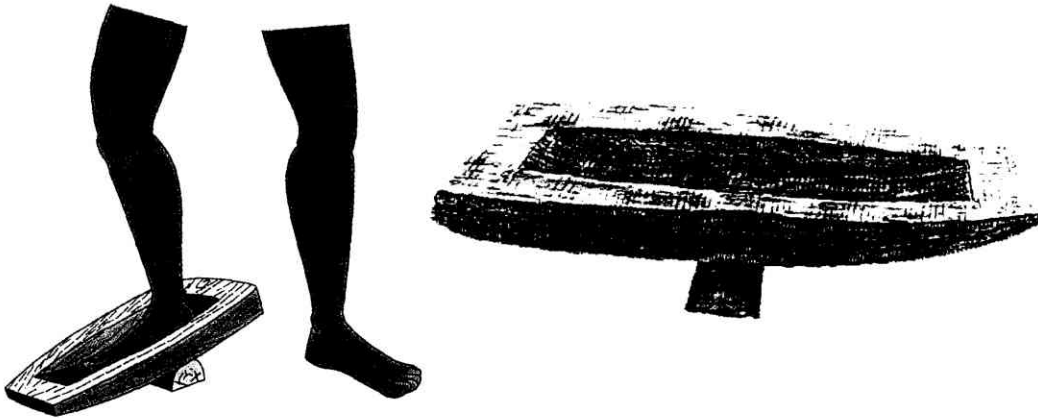
古代ハワイ音楽(2)



古代ハワイ音楽(2)

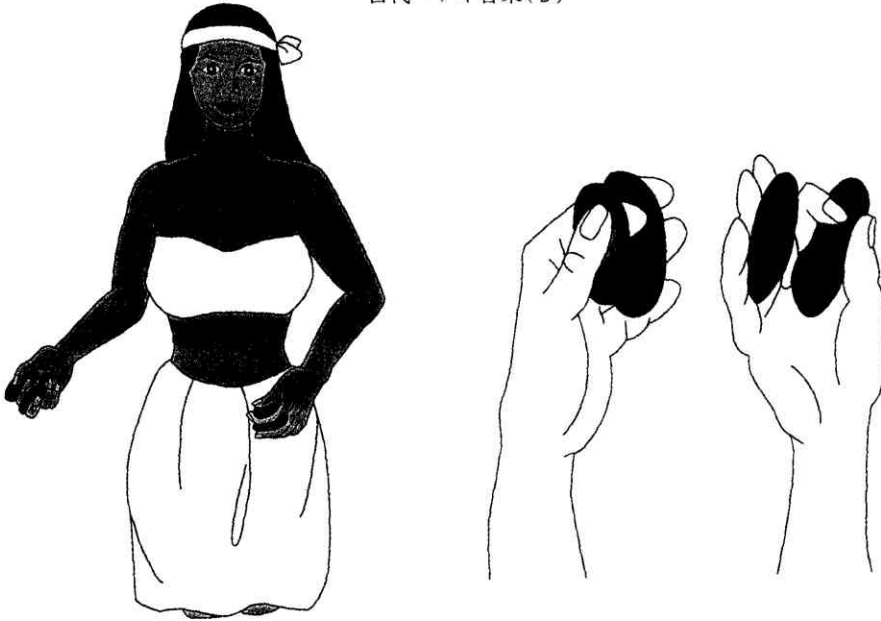
(2) papa hehi (パパ ヘヒ)

木製の踏み板の一種であり、厚さ1.5インチ、縦12~19インチ、横7~9インチほどの厚板で、地面に置いた横木の上にこの厚板を置いて足で踏みながら拍子を取るための楽器である。木の厚板の代わりに、平らな石板を用いることもあったという。このパパ・ヘヒは必ずといってよいほど kāla'au (カラアウ) と共に用いられた。もともとカウアイ島やニイハウ島で踊られていたフラによく用いられていたものであるが、古代ハワイ音楽への最近の関心の高まりとともに時々フラに加えられることがある。



(3) 'ili'ili (イリイリ)

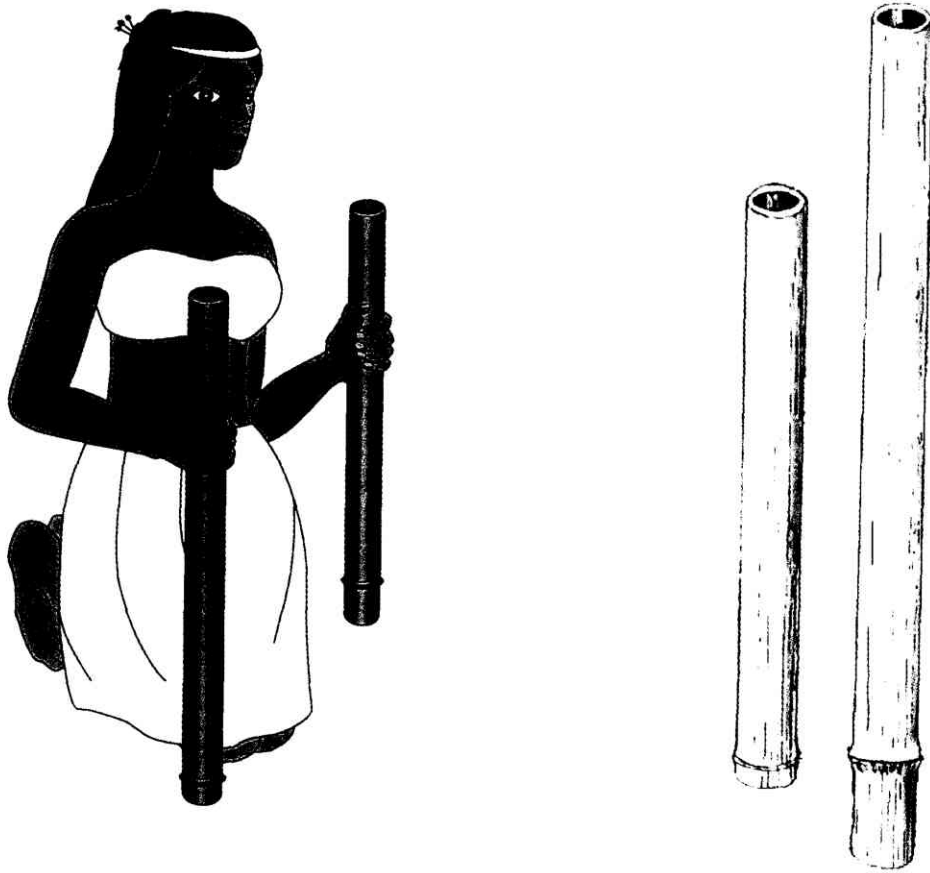
溶岩から出来た小石を片手に二つずつ持って、恰度スペインのカスタネットの様に音を出すものである。二つの小石を叩いて音を出すのであるから硬い小石が選ばれ、気泡の混ったものは避け、自然に風化して小石となったものを選ぶが、特に硬い重い石を選んで、これを磨いて角を取って作ることも行われる。主に座踊のフラでイリイリを用いるが、これを hula 'ili'ili (フラ・イリイリ) といい、パフも同時に用いられることが多い。イリイリのリズムのパターンはカラアウのものによく似ている。スペインのカスタネットは元来ムーア人が持ち込んだ chestnut=castaña (栗) が起源であり、同様にムーア人がインドに持ち込んだものが東インド、東アジアを経てポリネシア地域に伝わったとする推測もあるが、この種の打楽器の起源となる発想は世界中至る所で自然発生的に起こるものではないだろうか。イリイリも、ポリネシアあるいはハワイの何処かで用いられ始めたものであろう。



(C) 竹筒 (bamboo tubes)

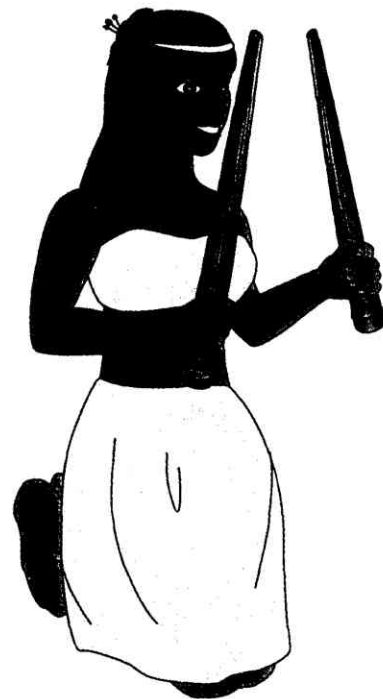
(1) kā'eke'eke (カアエケエケ)

'ohe kā'eke (オヘ・カアエケ)、'ohe kā'eke'eke (オヘ・カアエケエケ)、pahū-pahū パフパフとも言われる。両手に持って地面で踏み鳴らすための竹筒である。竹筒の一方は節が抜いてあり、他方の節は残してある。節の位置は中程から下の底部にかけて様々あるが底から数インチ上のものが多い。竹筒の大きさは平均的なものは長さ20インチ、直径1インチ程のものであるが、大きいものは長さ50インチ、直径2.5インチのものもある。竹筒が長く大きくなる程、地面に叩いた時の音程は低い。大きさの異なる複数の竹筒で同時に地面を叩くと微妙なハーモニーを出すこともある。メレ・フラの伴奏として用いられ、複数の奏者が座るか膝立ちして演奏するか、一人での場合もある。これまでパフとともに演奏されることも多かったが、現在でもフラの伴奏に用いられたり、ギターやウクレレからなるグループと共に演奏されることも多く、今日でも現役の楽器と言える。例えば、Waimanalo Keikis (ワイマナロ・ケイクス) という子供から成るハワイの楽器演奏グループがクリスマス・ソングのレコーディングでカアエケエケを取り入れているし、またこの楽器を題材にして、Maddy Lam (マディー・ラム) が作曲した "Sweet Singing Bamboo" はヒット・ソングになったこともある。



(2) pu'ili (パイリ)

端から三分の一くらいの箇所には節がくる様に切った20インチ前後の竹筒の、節から端迄の長い方、つまり三分の二に当たる部分が茶筌状に縦に細く裂かれてあり、残りの三分の一の部分が持ち手になっているというものである。これで物を叩くとシャン・シャンという音が出る。元来この楽器は座踊のフラで互いにペアを組んだ踊り手がこれを片手に持って、ペア同志で互いに一方の所作に他方が応えるというかたちで、相手の腕や肩や地面を叩いて音を出し、フラのリズムに合わせるといったものである。時には互いにパイリを空中に投げて交換するといった演技もおこなう。今日盛んな立踊のフラでもパイリはよく用いられており、専ら両手にパイリを持ってパートナーだけでなく自身の肩を叩くことも多くおこなわれる。パイリを加えたフラは見ていて誠に楽しいものであり、今日踊られるフラでもよく取り入れられるが、このパイリの音の音楽性という点では他の楽器に比べて、いま一つアピールするものが少なく、例えば、イプの様に現代のハワイの演奏グループが演奏に取り入れるといったことは皆無といってよい。



(D) 「ガラガラ」類 (rattles)

(1) 'ulī'ulī (ウリウリ)

直径3～6インチ程の小型の瓜あるいは椰子の実の殻に握れる程の持ち手を付け、そ

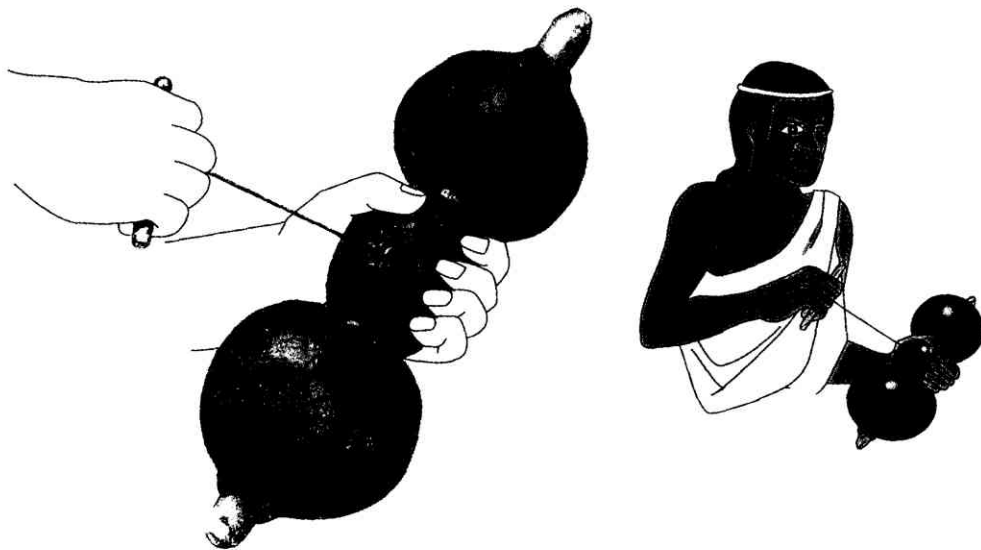
の端に円形のタパの繊維の布を付け、これに鳥の羽毛で縁取りし、殻の内部に ali'ipoe (アライポエ)の種子や貝殻や小石を入れたものである。往時のものにはタパや羽毛の飾りのないものもあった。羽毛の飾りのものは比較的新しいものに多い。⁽²⁰⁾立踊、座踊いづれのフラでも今日なお盛んに用いられる。奏法としては、この楽器を振ってシャラ・シャラという音を出すものと、平手または体の一部で楽器の側面を叩いて音を出すものがある。ハパ・ハオレの曲に合わせて踊るフラにおいては、両手にウリウリを持って踊ることが多い。いづれにしてもリズムカルな活発な感じの曲に用いられる。パフやイプとともに演奏されることもあり、これらの楽器に比べて二次的な役割を果たすものであったが、1964年に至ってこのウリウリが正式な楽器として脚光を浴びることになる。ウリウリの製造業者が「ウリウリは楽器に非ず」という理由のもとに10%の楽器税を支払わないことを決め、連那政府を相手に過去5年分の納税額の払い戻しを要求して法廷で争うこととなった。裁判の過程で、前代未聞のことながら、ウリウリの演奏も伴ったフラダンスの実演が証拠として披露されたが、サン・フランシスコの当該巡回控訴裁判所の判決は「ウリウリと称する羽毛付きの瓜は楽器である」というものであった。

リズムのパターンは4拍子を基調とするもので、次のものなどはその一つである。



(2) 'ūlili (ウリリ)

ユニークな構造の楽器で、三個の瓜をスティックで刺した状態の構造となっている。上と下の瓜は中のものよりやや大きく梨型で尖った方が外側にあり、ここからスティックが2～3インチ突き出している。上と下の瓜はスティックに固定されており、中の瓜には小穴があげられており、そこから紐を中に通して中の瓜の中心部あたりでスティックに結びつけられている。先づ上下の瓜を廻すと紐がスティックに巻き付き、つぎに紐の端を引っ張ると上下の瓜は逆に廻る。左手で中の瓜を攪んで右手でこの紐を引っ張っては力をゆるめるといった動作を繰り返すと、上下の瓜は左右いずれかの向きに何回かずつ廻る。上と下の瓜の中に種子や貝殻や小石を入れてガラガラという音を出すこともあるが、本来は何も入れず、ただ上と下の瓜の廻る音のみが楽器としての音色であって、強いて効果を加えるために小さなスティックの助けを借りることもあるものの、強いリズムを刻む楽器を必要とするフラの伴奏のための打楽器としては適当ではない。あくまでもパフなどのリズムを刻める打楽器のために付加的な効果音を出す目的で用いられた。



(3) kupe'e niho 'īlio (クペエ ニホ イリオ)

kupe'e (クペエ) は足飾り、niho (ニホ) は歯、'īlio (イリオ) は犬、つまり犬の歯を使った足飾りで、多数の犬の歯を網状に編んだ olonā (オロナ) の紐に取り付けた、幅が9インチ程のものを、男性の両足の膝の下の部分に結び付け、足を踏むとジャラ・ジャラという音が出る。極く古い時代のフラを男性が踊る際に着けて踊る。往時も犬の歯の他に鯨の歯や貝殻、獣骨が用いられたが、今日作られるものは専ら貝殻を用いている。



IV その他

(1) nī'au kani (ニアウ カニ)

nī'au は椰子の葉肋、kani は“to sound”（響く）を意味するので、本来は椰子など樹木の葉肋で作られたものであった。しかし現存しているものの構造は口琴あるいは「びやぼん」と同様、小さな固い木等の土台にブリッジの様に渡したかたちで細長い金属や木片を固定し、この土台を口でくわえ、このブリッジを指で弾いて振動させるというものである。本来のニアウ カニは幅約1インチ、長さ4インチ程の薄い木片、竹片などの土台の端に6～8インチの細長い棒状の椰子の葉の主脈又は竹を片側に寄せて固定し、この土台を唇にくわえて、棒の突き出た部分を指で弾く。同時に奏者は唇と舌を動かしてメレを口ずさむのであり、ニアウ カニは専ら mele ho'oiipoipo (メレ ホオイポイポ) つまり「愛の歌の内容を持つメレ」を歌いながら演奏された。カメハメハ一世の王宮でよく用いられたというが、楽器としての役割を果たしたとする記録は殆んど無く、むしろ玩具に近いものとして存在したと言えるもので、“jew's harp” (ユダヤ式ハープ) の一種だとされることもある。玩具に近いものとしてポリネシア全域に存在しているが、ニュー・ジーランドでは原住民のマオリ人達の間では roria (ロリア) として知られており、⁽¹⁹⁾ 原流の一半は、ニュー・ジーランドに寄港した西欧人が持ち込んだ金属製の“jew's harp”にあるのかも知れない。

古代ハワイ音楽(2)



(2) bamboo tubes (竹筒)

ホノルルのビショップ博物館には多くの竹筒のコレクションがある。これらは節と節との間の部分から成っていて、両端の節は打ち抜かれてあり、側面には指孔があげられていないのでフルートの一種ではなく、単なる竹笛とされている。そして専ら“kuni”という祈禱で用いられたといわれる。研究者のロバーツもこれら bamboo tubes をフルートと断定はしていないが、これらが笛として用いられた事例を収集している。

bamboo tubes は、ハワイ語では“ohe kā‘eke”といわれるが、この例えばビショップ博物館所蔵の bamboo tubes などは“hoehoe”と呼ばれており、この言葉を“The Andrew-Parker Dictionary” (1922) で参照すると、“a tubular wind instruments among Hawaiians resembling the flute” (ハワイ人達の間で用いられている、フルートに似た竹の筒)とあり、“same as the hano”(「ハノ」と同じもの)としている。“hano”は flule を意味するので、これらの bamboo tubes は、flute と呼ばれるものの如き横穴は無いものの、フルートとして用いられたものと判断してもよいのではないだろうか。

〔註〕

- (1) インドの古代楽器“gōttvādyam”(「ゴトゥバディヤム」)ならびに“vichitra veena”(「ヴィチトラ・ヴィーナ」)は共に8弦のもの、中国、日本でも一弦琴が存在したが、いずれもスティール・ギターと同様の奏法で弾く弦楽器である。世界の他の地域にも同様の奏法による楽器が存在することは充分想像出来る。
- (2) 弦楽器 (musical instrument に分類はされるものの、楽弓 (musical bow) の域を出な

古代ハワイ音楽(2)

いとして、この表現を用いている文献もある。Te Rangi Hiroa (Perer H. Buck) “Musical Instrument” in Art and Crafts of Hawaii IX August, 1964 pp.388

- (3) Roberts, Helen H. “Ancient Hawaiian Music”. B. P. Bishop Museum Bulletin 29. Honolulu 1926 : Bishop Museum Press p. 24
- (4) 前掲 Roberts, p. 20
- (5) 前掲 Roberts, p. 28
- (6) Emerson, Nathaniel B.
“The Unwritten Literature of Hawaii” : The Sacred Songs of the Hula. Tokyo : Tuttle, 1965. Reprinted from Bureau of American Ethnology Bulletin 38, Washington, D. C., 1909 (Paperback edition, 1974) p.145
- (7) Roberts, Helen H. “Legend of the Origin of the Nose Flute of Two Holes (Hano) as Given by Mr. Sam Ke Ka’owai of Honolulu and of the Island of Moloka’i”. Bernice P. Bishop Museum Library 所蔵未公開資料 p. 3 諸説ある nose flute の起源説のうちでも興味深いものの一つである。
- (8) 前掲 Emerson P. 146
- (9) Gowen, Robert H. “The Story of Kiha-pu.” Paradise of the Pacific, June 1911, p. 16
- (10) Barrère Dorothy. “Conch Shell Trumpets”. The Conch Shell, University of Hawaii 1963, pp. 3-5
- (11) Roberts Helen H. Ancient Hawaiian Music. B. P. Bishop Museum Bulletin 29. Honolulu 1926 : Bishop Museum Press pp. 44-45
- (12) Pukui, Mary Kawena. “Hawaiian Poetry and Music”. Kamehameha School 上級学年生向講義録、May 6, 1945
- (13) Tatar Elizabeth. “Slack Key Style Descends from Ancient Pahu and Ipu”. Ha’ilonno Mele, May 1977, pp. 4-7
- (14) Buck H. Peter (Te Rangi Hiroa). Arts and Crafts of Hawaii Section IX Musical Instrument. Bishop Museum Press 1957, p. 399.
- (15) 前掲 Buck p. 397
- (16) Kanahale S. George. Hawaiian Music and Musicians. Honolulu : The University of Hawaii Press, 1979 p. 175

古代ハワイ音楽(2)

- (17) Ii John Papa. Fragments of Hawaiian History. Translated by M. K. Pukui.
Honolulu : Bishop Museum Press, 1959, p. 137
- (18) 前掲 Buck p. 404
- (19) 前掲 Buck p. 395